



「彫刻を単にオブジェとして完結させるのではなく、彫刻自体を体験ととらえ、空間をつくっていかない」と満足いかない」(名和)

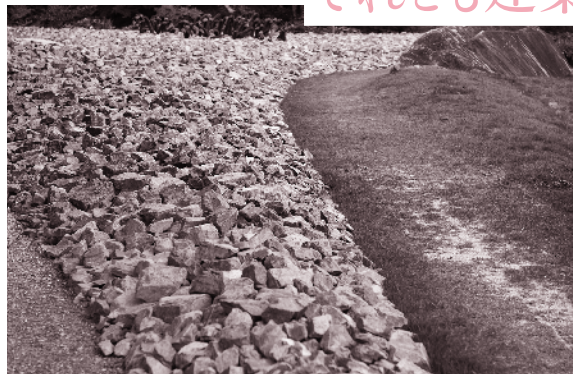
トークは作品の細部へと移る。《洗庭》の図面をプロジェクション

し、名和氏による解説が始まった。「シルエットが非常に重要です。屋根の形状は、ほかのお寺の角度を参考にしています。どこをとっても直線はなく、緩やかな膨らみ、曲線で形づくられているんです」。五十嵐氏が「これは彫刻なのか。それとも建築なのか」と率直な質問を投げかける。「屋根の角度は、大量の模型をつくり、スタディを重ね、鉛筆で何回も書き直したものをトレースしながら詰めていきました。アールが切り替わる場所の比率をすべてルール化し、美しくなるように図面を更新していくことで自ずと形状が決まっていきましたね」と名和氏。ある種、彫刻的に手を入れ形づくられていること、そして開口部が出入り口のほかにないことも《洗庭》の造形性を高めている。同時に、建築的には奈良「正倉院」や「東大寺大仏殿」でも使われている「寄棟造」の屋根形状と近い。そういった意味でも彫刻と建築の完全な分類は難しく、“アートパビリオン”という名称は、その複合性をうまく表したと言えるだろう。

休憩をはさんで後半は、名和氏のこれまでの作品を振り返り、《洗庭》との関連を探る時間となった。

代表作《BEADS》シリーズ

「これは彫刻なのか。それとも建築なのか」(五十嵐)



ズの《PixCell》は、インターネット上で収集した鹿の剥製や液晶テレビ

甲冑などの物体をクリスタルガラスの球体で覆うことで、レンズを通した実像を、映像的なものとしてとらえる試みである。彫刻と映像の境界にある特有の体験という点では、《洗庭》のコンセプトにもつながる。

また、「あいちトリエンナーレ2013」で発表された《Foam》は、広い空間のあちこちにある、液面から湧き出る小さな泡(Cell=セル)が寄り集まって有機的な構造を形成してゆく作品だ。五十嵐氏は「眺めているだけで、永遠に続くような不思議な時間が流れますね。生命の始まりの風景を想像させられるようなランドスケープでした。何万年も時が経って、何かの拍子に原始的な生命が生まれるんじゃないか、という雰囲気が作品にある」と称した。

2016年に発表された振付家のダミアン・ジャレ氏との共作《VESSEL》(=「器」「舟」の意)は、重力や肉体、



Damien Jalet | Kohei Nawa 《VESSEL 2016》
ロームシアター京都(2016年)

VESSEL(器/舟)を題に生と死や、大地と生命の循環を想像させる舞台作品。河原、黄泉、鳥、植物相、トテム、獅子、蜘蛛、悪霊と、ダンサーの肉体が織りなす“態”を変えていながら、プレ・ヒューマンの世界を描く。